

福島第1原子力発電所の事故から、あすで10年になります。事故の翌月から、福島、とくに飯館村の支援を続けてきた私にとっても感慨深いものがあります。

幸い、住民の被曝(びばく)量は非常に少なく、とくに、食品の放射能については徹底した管理がなされてきました。米や肉などの一般食品の放射能の基準値は、EUや米国のおよそ1/12のキロあたり100ベクレルと設定されました。そして、事故翌年の2012年から米の「全量全袋検査」が開始され、15年産以降、すべての米袋がこの厳しい基準をクリアしています。食肉についても同様で、天然に存在する放射性物質による内部

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

福島から学ぶリスクの「相場」

多くの国では、自然の外部被曝量が年5ミリシーベルトを超えますから、いかに低いレベルか分かります。思います。

14年には、福島の高校生がフランス、ポーランド、ベラルーシの高校生と共同して、各地の外部被曝量を測定し、英語の論文にまとめました。福島を含めて、各地域の線量レベルに差がないことを

相馬市で行われた測定の結果では、年間の線量は平均で1.36ミリシーベルトでした。これは自然放射線とセシウムなど、事故に伴って発生したものを合算した数字です。ヨーロッパの

示したこの論文は11万回近くダウンロードされています。福島事故は、チェルノブイルと同じ「レベル7」と言われますが、住民の被曝量には雲泥の差があります。「福島

の勝利」と言えますが、事故から10年たった今も4万人近い住民が避難を続けています。低線量被曝で起こりうる人体影響は「発がんリスクの上昇」だけです。がんを避けるために避難を続けてきたことになりました。

しかし、避難者の健康状態は悪化しており、とくに、糖尿病が6割増えたというデータもあります。糖尿病はがんを2割も増やしますから、がんのリスクを抑えるための避難が結果的にがんを増やしてしまうことになりました。

コロナ禍でも言えることですが、リスクの大きさを冷静に捉える「相場観」を持つことが大切だと思います。

(東京大病院准教授)